



至るところ小宇宙

小川 明

未明の稲光と雷鳴に起こされた。激しい雷雨が2、3時間延々と続く。どこかで雷の被害が出ているのではないか。そんな心配がよぎり、つい眠りが浅くなってしまった。

「それは『雪起こし』という雷で、初冬の福井の名物だよ」と、地元の友人に教えられた。福井の人々は、この雷で雪の季節が近いことを実感するらしい。

移り住んで数カ月たつのに、まだ新鮮な驚きの連続である。1年の四季が巡って、慣れるのだろう。超高層ビルブームの東京の喧噪から離れて、スローライフを楽しんでいる。

福井に来て、初めて体験することは多い。NIE（教育に新聞を）の活動で、記者派遣授業に中学校と高校へ出かけた。中学1年生には「取材のこつ」を話すよう依頼された。

生徒たちに聞くと、新聞を読んできたのは半分足らず。自宅でインターネットを見ている生徒は4分の3に上った。新聞離れに「見るだけでも新聞は面白い」と訴え、「取材は人に会って話を聞き、メモするのが基本。取材力は生きていくのに役立つ」と強調した。

どれだけ話を分かってくれたか、怪しい。生徒は静かに聞いてくれるのだが、反応は弱い。のれんに腕押し之感をぬぐえないが、それでも授業後、生徒の代表に謝辞を送られたりして、教育の魅力の一端は味わえた。

いま住んでいるのは福井市の中心部。歌人の俵万智さんが高校時代を送った田原町（たわらまち）に近い。自転車で5分の福井大では、休日のたびに数学講演会や理科教育フォーラム、原子力シンポなどが盛んに開かれており、気が向けば、ぶらりとのぞくことができる。

これまで最先端の科学や医療の報道に明け暮れてきたが、果たして本当に必要な記事がどれだけあったのか、教育問題にもっと力を注ぐべきではなかったのか、と自戒の念が浮かぶ。数学の上野健慈さん（京大）や岡部恒治さん（埼玉大）、化学の伊佐公男さん（福井大）らの話を聞き、新しい刺激と意欲を吹き込まれた。

福井は新幹線も通ってなければ、定期航空路のある空港もない。原発だけは若狭に集中している。田舎だが、それぞれの地域に入れ子のように小宇宙が連なり、豊かな自然が残る。ローカル線も細々と維持され、過疎化、少子高齢化に抗しようとする志がうかがえる。

「此道や行人なしに秋の暮」（芭蕉）。そんな風情の中、相変わらず原発のトラブルやミスが多発する。美浜原発がテロリストに迫撃砲で攻撃されたという想定で、国民保護法に基づく全国初の「国民保護実動訓練」も仰々しく実施された。

伝統と自然、原発が重なり合う地方から、日本と世界の動きをじっくり見守るのも悪くない。

（共同通信福井支局）

CONTENTS

| | |
|----------------------------|---|
| 至るところ小宇宙 | 1 |
| 例会報告1 国立科学博物館の新館を見学 | 2 |
| 例会報告2 科学と社会をつなぐ人材養成、大学で始まる | 3 |
| 例会報告3 青カビから発見—スタチン開発秘話 | 4 |
| 会員だより1 私とナノテクノロジー | 5 |
| 会員だより2 どこにでもある対話のきっかけ | 6 |

| | |
|-------------------------|----|
| 会員だより3 ミュゼオログと仏国立自然史博物館 | 7 |
| 会員だより4 居酒屋「理系白書ブログ」始末記 | 8 |
| 第5回科学ジャーナリスト世界会議への誘い | 9 |
| 科学ジャーナリスト賞の募集開始 | 10 |
| 出版プロジェクトについて | 11 |
| 「第4期科学ジャーナリスト塾」中間報告 | 11 |
| 新入会員の自己紹介／事務局だより | 12 |

国立科学博物館の新館を見学

「科博」の愛称で昔から子供たちに親しまれてきた東京・上野の「国立科学博物館」。その新館が2004年11月にオープンし、大人の集客も視野に入れた博物館として装いを新たにしました。9月例会は14日、この科博の見学会として開かれ、33人の会員が参加した。ずいぶん久しぶりに科博を訪れたという参加者も多く、時おり童心に帰って多彩な展示を楽しんでいた。

生命進化の壮大な展示

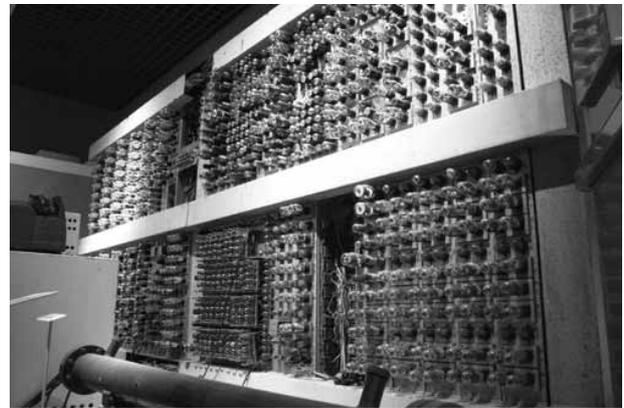
「地球生命史と人類 自然との共存をめざして」をテーマにした新館は、展示面積が8900平方メートルと広大だ。地球46億年の歴史のなかで、生命がいかに誕生し、多様な種へと進化をとげてきたかを、様々な角度から見せている。

圧巻は、3階の「大地をかける生命」のコーナー。100頭にもおよぶ大型哺乳類や草原の野生獣などの実物剥製が、今にも駆け出しそうに集団展示されている。

人類の進化を体系的に展示した地下2階のコーナーも興味深く、新館の目玉展示の一つという。猿人、原人のほか、われわれ人類とほとんど差がない旧人のネアンデルタール人の復元像が、まるで生きているかのように並んでいる。



▲人類進化の展示



▲国産コンピューター、FUJIC

日本初の人工衛星「おおすみ」の実験模型や、コンピューター時代の先駆けとなった日本初の電子計算機「FUJIC」(真空管式)など、歴史的な展示物にも目を引かれた。

科学博物館にも環境変化の波

見学に先立つ説明会には、佐々木正峰館長も出席して、科学博物館の現状と課題などを語った。2年後に130周年を迎える科博は新たな環境の中に置かれており、科学コミュニケーション能力の向上や大学との協力強化、高まる生涯学習需要の受け皿としての役割など、多角的な取り組みを始めているという。

参加した会員からは、「展示の内容は充実しているが、入場者の数がまだ少



▲懇親会で挨拶する小出会長

ないのではないか」「世界に数ある科学博物館の中での当館の特徴は？」といった辛口の質問も。近くのレストランに場所を移して行われた懇親会にも科博幹部の同席を願い、活発な意見交換を行った。

(北村 行孝)

科学と社会をつなぐ人材養成、大学で始まる

杉山滋郎・北海道大学教授

10月例会は20日、北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット（CoSTEP）の代表である杉山滋郎教授を招いて開かれた。科学技術の現場と一般市民の乖離や子供の理科離れが唱えられて久しいが、CoSTEPは科学と社会をつなぐ人材の養成プログラムとして、東大・科学技術インタープリター養成プログラム、早大・科学技術ジャーナリスト養成プログラムとともに、本年度の科学技術振興調整費の目玉として採択された。会員にはとりわけ関心の高いテーマであり、約70人が参加して講演に聴き入った。

杉山氏は、科学史・科学哲学専攻の出身で、相対性理論などの物理学史の研究から、科学と社会の関係、さらに科学コミュニケーションへと研究対象を広げていった。CoSTEPは本年から5年間のプログラムで、10月より人材養成が始まった。

2つのコースで44人が受講

CoSTEPには、一般に開かれたコミュニケーターコースと、北大大学院生が対象の研究者コースがある。コミュニケーターコースの受講生は実質的に学歴不問であるが、将来にわたって科学コミュニケーション活動を継続していく意欲のある人を求めている。初年度は54人の応募者から、全課程を履修する本科生10人と科目履修生の選科生34人が選ばれた。年齢は20代から最高59歳、職業は学生・主婦・会社員など多岐にわたる。初年度は半年間、来年4月からは1年間で、5年間で本科生50人以上を含む100 - 150人を養成する予定だ。来年4月から始まる研究者コースでは、大学院生が理学院自然史科学専攻科学コミュニケーション講座に在籍しながら、CoSTEPの授業を受講する。

教育スタッフには、学内の教員だけでなく、科学報道番組の制作者、博物館の展示企画者、フリーのサイエンスライターなどを招き、多彩な人材をそろえた。このプログラムの特徴は、講義や演習もさることながら、修士論文がわりに作品制作をすることにある。作品には、活字媒体だけでなく、出前授業、コーヒーを片手に研究者と語り合

うサイエンス・カフェ、科学技術のあり方について市民が参加して話し合うコンセンサス会議の企画運営なども含まれる。受講生自らが人材や仕掛けなどを効果的に向き合わせて場を創出し、社会に発信することが重要だという理念がある。



▲杉山滋郎・北海道大学教授

地域に密着したイベント活動も

CoSTEP自体もイベント活動に力を注いでおり、10月には天文学を題材にしたサイエンス・カフェを札幌市内で開き、150人以上の市民が参加した。また、毎週土曜日には、札幌市のほぼ全域をカバーするコミュニティFM局で、ラジオ番組「かがく探検隊コーステップ」の放送をしている。小学校高学年にわかりやすく科学を伝えるという目的で、科学に関することわざを紹介したり、子供が研究者にインタビューしたりするコーナーがある。

受講後の活躍の場をいかに創り出すかが、今後の大きな課題である。杉山氏は、科学技術コミュニケーターは現段階では「職種」として認められておらず、「役割」だと語る。活躍の場を広げるためにCoSTEPが取り組むとともに、根本的な国の施策も欲しいと熱を込めた。たとえば、近年の科学技術の大きな競争的資金は、資金の数%程度を広報や成果発表に使うように指定しており、競争的資金を取得したら科学技術コミュニケーターの訓練を積んだものをスタッフとして一人雇用するよう定めることなどを提案した。

講演後は、瀬川至朗・毎日新聞科学環境部長の司会のもと、活発な質疑応答が繰り広げられた。科学コミュニケーターの可能性について杉山氏は、地域での幅広い連携や出前授業などを通して、ジャーナリズム以外の社会の要望に応えていきたいと話した。

（橋 由里香）

青カビから発見—スタチン開発秘話

遠藤章・東京農工大名誉教授

11月24日の例会では、青カビの中から高脂血症の特効薬「スタチン」を発見した遠藤章・東京農工大名誉教授を迎え、スタチン開発秘話を語ってもらった。スタチンは血中のコレステロール濃度を低下させる薬で、現在、世界中で高脂血症や動脈硬化の患者約3000万人が服用している。

遠藤さんは1933年、秋田県の農家の次男として生まれた。こどものころから麹づくりやキノコとりを手伝うなかで、カビやキノコに興味を持ったという。なかでも、人はおいしく食べられるのに、ハエには命取りとなる「ハエトリシメジ」には強い興味を持った。

地味な脂質を研究テーマに

農業技術者を目指して東北大学農学部に進学。三共製薬に入社するが、大学でも三共でもハエトリシメジの研究は許されなかった。三共では、核酸や遺伝子研究に人気集中するなか、人気がない脂質を研究テーマに選び、米国のアルバート・アインシュタイン医科大学に留学。コレステロール低下剤の開発を目指すことを決めた。

1968年に帰国。71年からHMG-CoA還元酵素（コレステロール合成の律速酵素）を阻害する薬の探索を開始した。そのときに立てた仮説が「HMG-CoA還元酵素を抑えれば血中コレステロール濃度が下がる」「カビやキノコの中に、他の微生物を攻撃する武器としてHMG-CoA還元酵素を阻害する物質を作るものがある」の二つ。そして73年、6000株のキノコとカビの中から、ついにコンパクチン（最初に見つかったスタチンの一種）を発見した。

会社に秘密で動物実験、治療も成功

ところが、ラットの実験ではコンパクチンがコレステロール濃度を低下させないことが分かり、開発はストップした。しかし「やっと見つけた虎の子をそう簡単に諦めるわけにはいかない。第一、私の仮説が間違っているわけがない」と思った遠

藤さんは、会社に秘密でニワトリとイヌで実験。コレステロールが大幅に低下することを証明した。ところが、会社から「ラットを使った毒性試験で肝毒性を起こす疑いある」と指摘される。そんななか、大阪大学の山本章



▲遠藤章・東京農工大名誉教授

医師から「18歳の家族性高コレステロール血症患者にコンパクチンを投与したい」との申し出があり、会社に秘密裏でそれに応じた。すると18歳の女性患者はコンパクチン投与で危機を脱した。山本医師はその後、10人の重症患者を治療。これを受けてコンパクチンの開発計画も復活した。

実用化ではメルク社が先行

遠藤さんは1979年、三共を辞めて東京農工大学助教授に転職。一方、三共のスタチン開発は1980年8月、「犬の長期毒性試験で腸管にリンパ腫ができた」との噂とともに中止された。

最初に実用化に成功したのは、三共と共同研究をしたことがあったメルク社だった。同社は87年、スタチンの一種ロバスタチンを発売、89年にはプラバスタチンを発売した。同社に出し抜かれたことについて、遠藤さんは、三共とメルク社が共同研究時に結んだ契約書の問題点を指摘した。

1985年、ブラウンとゴールドシュタインの両博士が、「コレステロール代謝に関する諸発見」の業績でノーベル医学・生理学賞を受賞。この時、遠藤さんの名前が受賞者の中になかったことについて、「薬の評価は発売してから10年かかる。スタチンが有効だと証明されたのは、1994年ごろだと思っています。それほど薬の場合は評価が難しいのです」と語った。

遠藤さんは、1978年世界で初めてスタチンを投与されて元気になった女性と、昨年再会したことを紹介、講演を締めくくった。（引野 肇）

私とナノテクノロジー

事始めは1986年

1983年に、友人の名大教授より走査型トンネル顕微鏡（STM）の文献が送られてきました。論文の発表者はIBMのローラー博士（Dr.H.Rohrer）です。さっそく興味をもち、コンタクトをしましたが、なしのつづて。困っていたら、ちょうど私たちの研究グループとIBMとが特許のクロスライセンスの契約をしようとしていたので、その中にSTMを入れておけばよいと思ってIBMの特許センター長と交渉し、OKとなりました。そのついでに、ローラー博士への紹介をお願いしたところ、すぐに手配してくれ、1986年にIBMを訪れ、博士と長時間にわたり話し合うことができました。



▲ローラー博士

今も記憶に残っているのは、ローラー博士がSTMを使って将来研究する分野はバイオの分野になるだろうと言われたことです。この1986年、同博士はSTM研究においてノーベル物理学賞を受賞しました。

新世代研究所の設立

1986年、ソフトサイエンスの研究機関として新世代研究所（向坊隆理事長）が設立され、その中でSTM研究会およびその分科会として電子物性、生体、高分子、固溶液界面の研究が始まりました。この研究会に参加した大部分の人が現在ナノテク分野のリーダーシップを取っているといつてよいでしょう。

ローラー博士は、この新世代研究所の評議委員となり、1986年から現在に至るまで、日本のほとんどの場所でSTMに関する講演会を行っていま

す。今年も11月下旬に来日、講演してくれました。題目は、「ナノテクの未来について」でした。

ローラー博士に出会い、新世代研究所が設立された年である1986年は、私にとって特別な年であるとともに、日本におけるナノテクの始まりとなった大変重要な年だと思っています。

これからどうなる

2005年11月に札幌で開かれた第16回STM国際会議には600人以上が参加しました。私はそこで、「ナノテクノロジーで豊かになろう」というタイトルで講演しました。以下に、その講演内容を簡単に紹介させていただきます。

これからの社会では、地球温暖化などの環境問題や水、石油を含む資源問題、少子化などが社会問題になります。このような社会でキーワードとなるのは省エネ 省資源 無公害 No産業廃棄物などであると思います。これらを実現するためには、必然的にナノテクノロジーが重要になってきます。また、ITおよび交通機関の発達により情報伝達の方法が大幅に変わってきています。

このようなインフラの変化にナノテクが使われることによって、世界の特に若い人同士で、情報の交換が容易になり、従来のような縦割り社会や階層社会ではなくなり、科学技術も横断科学技術の時代となるでしょう。

さらに、最近では、100%植物化プラスチックのような材料も登場してきています。材料が変われば、もの作りも変わるし、当然システム、組織も変わってきます。世界的に情報交換が容易になると、横断科学技術となり組織はもっとシンプルな形となるでしょう。

そうなると、従来のような仕事のやり方では対応できなくなってくるでしょう。このように、これからの産業技術の発展には、ナノテクが想像以上の変化をもたらすことになるでしょう。第三次産業革命の時代がくるといっても過言ではないと思います。

（内山哲夫）

どこにでもある対話のきっかけ

科学について語り合うイベントが人気を集めている。フランスのポワティエで毎年秋に開かれる「CNRS 科学と市民の出会い」(国立科学研究所主催)もそのひとつだ。

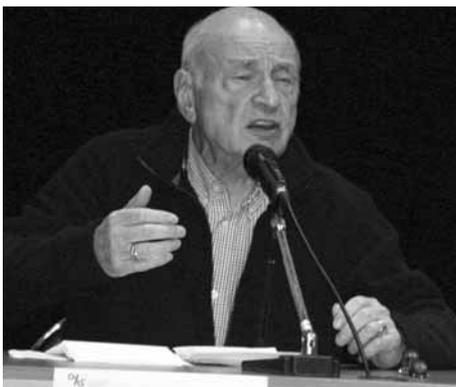
研究者と18~25歳の若者が科学について語り合うこのイベントについては、当会会員の桃木暁子さん(総合地球環境学研究所助教授)から伺っていた。今回、別件で桃木さんとスイスのジュネーブ大学へ一緒する用事もあったため、ポワティエまで足を伸ばし、私もオブザーバーとしてイベントに参加した。以下はその報告である。

個人の意識に向けられるトピックス

10月21~23日に行われた「科学と市民の出会い」のメイン・プログラムは、ワークショップでの自由闊達な討論である。

今年のトピックスは、「宇宙開発は本当に必要か」、「環境と健康」、「動物と人間」、「宗教・文化・紛争」、「いま、研究者であるとはどういうことか」などの9テーマ。まず研究者たちがトピックスに沿って自分の考えや研究について語り、参加者がそれを糸口にして率直な意見を述べ合う。

参加者を若い人に限定しているのは、むろん次世代の育成ということもあるだろう。だがそれだけではなさそうだ。そもそも若者はあまり専門的な常識にとらわれないし、個人の根本的な問題意識をストレートに表現する。たとえば「環境と健康」というワークショップは、「環境問題についての情報をどこまで受け入れて行動すべきか」と



▲エドガール・モラン氏

いう問題提起から始まる。これなら、たとえ「予防原則」という用語の意味を知らない学生でも、本質的に重要な論点だけを踏まえて最後まで討論に参加できる。そうした中から、研究者たちの気づかないような新しい論点が飛び出すこともある。

また最終日の総括では、各ワークショップを代表し、雑多な意見も上手にまとめる学生たちの采配が好印象を与えた。

エドガール・モラン氏は健在

今回、個人的に感慨深かったのは、このイベントの発起人でもあるエドガール・モラン氏にお会いできたことだった。ジャーナリスト出身のモラン氏は、人間・社会・自然の知を統合することのできる数少ない現代思想家のひとりである。

モラン氏の代表的な本といえば、若い人は『複雑性とは何か』など一連の科学哲学書を挙げ、壮年の方は『オルレアンのうわさ』を挙げる。私はパリ留学時代にジベール書店で見つけた『20世紀からの脱出』に特別な思い出がある。

本の中だけで「対話」をしてきた相手と一瞬にせよじかに接するのは、何だか妙な気分である。会場でぱったり出くわした私が自己紹介をすると、モラン氏は手帳のなかに一葉の擦り切れた名刺を見つけ、はにかんだ笑顔で差し出してくれた。

最終日にモラン氏は、科学についての講演で1時間近くも熱弁をふるった。その内容はこれまでの膨大な著作群とおなじく、政治・経済・人文・科学技術などのさまざまな論点をダイナミックに包摂したものだ。84歳を迎えた「知の巨人」は、いまままだ健在である。

この秋、パリ郊外に始まった移民の暴動はフランス内外で大混乱を招いた。鳥インフルエンザやアスベスト訴訟の報道もあった。しかしリスクや不安の多い時代ほど、ひらかれた「対話」の場が求められる。「CNRS 科学と市民の出会い」は、若い参加者たちにその大切な習慣ときっかけを提供しているように思えた。(門脇 仁)

ミュゼオロークとフランス国立自然史博物館

「ミュゼオローク (muséologue)」という職業をご存じだろうか。あまり聞き慣れない名だが、直訳すれば「博物館学者」、つまり、フランス語で、ミュゼオロジー (博物館学) をする人である。では、この人々は実際になにをしているのか。

昨年、今年と、フランスの国立自然史博物館をたずね、このミュゼオロークの一人に話をきくことができた。

フランス国立自然史博物館といえば、パリの「植物園」の名で親しまれているが、なかでも進化大陳列館の展示のユニークさと美しさは、日本の展示関係者にもよく知られている。

市民の目線で展示企画

フランスの博物館には、研究省の傘下にあるものと文化省の傘下にあるものがある。ミュゼオロークとよばれる人々をかかえるのは、前者である。国立自然史博物館のほか、発見の殿堂 (科学技術博物館)、国立工芸博物館、ブランリー河畔博物館 (民族学)、科学産業都市 (ラ・ヴィレット) そしてその他の地方の自然科学系博物館がこれに含まれる。これらの機関は、研究を主な活動の一つとすることが特徴である。

ミュゼオロークたちはそこで、展示企画コーディネーター的な役割を果たしつつ実際の企画を行なう。研究者、一般市民、舞台装置家のそれぞれと双方向のコミュニケーションをもち、研究者が見せたいもの、一般市民が望むこと、舞台装置家が使いたい方法の3つをコーディネートして、展示を企画するのである。

このような四者体制をとっているのは、フランスでもこれらの機関だけ、世界的にはフランスだけだという。フランスのその他の博物館では、日本でいう学芸員が研究者と相談して展示を企画する。

二つの体制の大きな違いは、企画担当者との一般市民とのコミュニケーションがあるかどうか。つまり、ミュゼオローク制をとった場合、展示企画のときに一般市民の目線をかなり具体的に考慮

できるという利点がある。そして、ミュゼオロークたちは科学者でもあるので、展示すべき内容の科学的意味を正確に理解していることが強みだという。



▲国立自然史博物館の正面玄関

研究者とは対等の立場で活躍

フランス国立自然史博物館は、1635年にフランス初の自然科学専門研究機関として創設され、フランス革命後の1793年に現在の名をもつ組織になった。一般市民に定期的に公開されるようになったのは、これより少し前の18世紀なかば。したがって、少なくとも200年以上の普及活動の歴史をもつ。

この国立自然史博物館の活動の柱は、創設以来変わらず、研究、普及、収集である。これに対応して、最新の組織 (2001年に再編) では、科学部門として七つの研究部門と三つの普及部門が設置されている。この普及部門というのは、この機関のいわゆる広報部門とは別の組織で、ここで、科学者でもあるミュゼオロークたちが、研究者と対等の立場で活躍する。

総職員数約1500人のうち研究者は約700人、ミュゼオロークは約40人ということだが、このように、普及部門が科学部門として充実しているからこそ、人々を魅惑する説得力ある展示を継続させることができるのだろう。

このような体制は、たしかにフランスのなかでも最も恵まれたものである。それにしても、日本の実情と比べると、うらやましい限りである。日本の研究機関も、「研究成果発信活動」を強調する以上、実質的な活動を確保するためにもう少しその体制作りを真剣に考えてもよいのではないか。

(桃木暁子)

居酒屋「理系白書ブログ」始末記

私たちの「理系白書ブログ」(<http://spaces.msn.com/members/rikei/>)が今年10月、100万アクセスを迎えた。昨年9月に開設してから13カ月。管理人としてはちょっとした達成感だ。

「人気ブログ」と言われても、1日に20分ほど、頭に浮かぶことを書いているだけだ。ある人が「その力の抜け具合がいいんですよ」と言った。なるほどなと思った。

料理屋のまかない飯に似ているかもしれない。素材を選び、丁寧に手をかけ、盛り付けにも凝った料理は当然おいしい。私にとっては新聞記事がそれにあたる。しかし、その料理人が、作業の合間に手早く作るまかない飯も、客にとっては目先の変わった一品になる。

ブログは「ウェブログ (Web log)」の略で、ウェブサイト上の公開日記のようなものだ。ホームページと違って簡単に始められる。記録 (ログ) は誰でも閲覧でき、登録すればコメントも書き込める。誰かが中身を引用すれば、「足跡」(トラックバック) からその人のブログに飛ぶこともできる。こうしてネットワークが広がる。

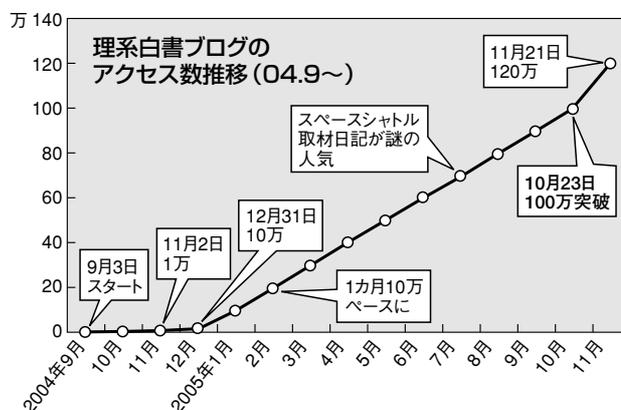
総務省の推計によれば、日本でブログを開いている人は470万人いるそうだ。おそらく大半は匿名。「理系白書ブログ」は、新聞記者が実名で運営しているという点では特殊な部類に入る。

読者との双方向交流

さて、私たちがブログを始めた動機は、読者との双方向コミュニケーションへの期待だった。

「理系白書」は、毎日新聞科学環境部の長期企画だ。2002年のスタート以来、反響を多くいただいていた。それに返事を出すだけでは、読者同士の交流に発展しない。読者層の広い企画ではあったけれど、もっと広げたいという欲もあった。

始めてみると、評判が気になる。アクセス数とその指標になった。最初は1日あたり50程度だった。やがて500になり、今年にはいると2000を超えた。今は1日5000というペースで、1年前に2カ月かかった1万アクセスは2日で稼げる。



ブログ上でのコミュニケーションは活発だ。私の書き込みに誰かが突っ込みを入れ、そのコメントに反論 (賛同) する誰かが現れる。BSE問題や理系人生、科学記者の取材手法、研究費配分の問題など、大きな論議になることもたびたびだ。

等身大で科学を語り合う媒体

このブログはいわば「居酒屋」である。私はぐうたら亭主。簡単な肴を用意して、客同士のおしゃべりを聞いている。幸運なことに、うちのお客はマナーがよい。時々絡んでくる客もいるが、誰かが仲裁に入ってくれる。

閉店時間がないのもいい。固定読者には、海外の研究者がかなりいるようだ。彼らの体験に基づくコメントは、私の生半可な知識よりはるかに説得力がある。

発見もあった。科学記者という職業は、それだけで興味をもたれるようだ。取材すれば必ず裏話があるし、記事に書けない思いもある。時には、よそゆきの記事より共感を呼ぶ。夏にスペースシャトル取材で米国に出張したが、いろんな人から「ブログの取材日記の方が (記事より) 面白い」とほめられたのには参った。

とはいえ、ブログはあくまで余技、「背伸びしない、無理しない」がモットーだ。来てくれる人がいるうちは、この居酒屋を開けようと思う。ここでのコミュニケーションから何かが生まれることを期待して。
(元村有希子)

2007年、メルボルンに行こう

2007年4月16日から20日まで、オーストラリアのメルボルンで、第5回科学ジャーナリスト世界会議が開かれる。日本からも大勢参加してほしいと、組織委員長のナイオール・パイアン氏と事務局のサラ・ブルーカーさんが11月22日に来日、牧野賢治、佐藤年緒、桃木暁子さんらJASTJのメンバーと意見交換した。

ニュースのネタはいっぱい

2人が強調したのは、オーストラリアには科学記事のネタがあふれている、ということだった。グレートバリアリーフから南極まで、多様で豊かな自然があり、それらの神秘を解き明かそうとする科学者たちがいる。しかもこの大陸には、独特の進化を遂げた動物や植物が繁栄している。カンガルーの遺伝子解析は、哺乳類と有袋類の差を明らかにして、哺乳類の本質を知るうえで欠かせない研究だし、オーストラリアに生息する貝の殻から新しい鎮痛薬を開発する研究なども進んでいる。南半球で有数の電波望遠鏡群もある。



世界会議に参加する海外ジャーナリストの取材の便宜は、できる限り図るといふ。

世界会議は、16日月曜の夜の歓迎レセプションに始まり、地球温暖化や鳥インフルエンザなど科学ジャーナリストが直面する大きな課題についての全体会議、テレビ、雑誌、新聞など分野ごとにわかれた分科会などを開き、20日金曜のオプション・サイエンス・ツアーで締めくくる。

評価の高い新科学雑誌が創刊

2人によると、オーストラリアでは科学ジャーナリストの数は少なく、一人がいくつもの媒体に

科学記事を書いたり、テレビやラジオ番組を掛け持ちしたりしているそうだ。新聞社で働く科学記者はきわめて少なく、朝日新聞には科学記者が30人ぐらいいると話すと、目を丸くしていた。

とはいえ、科学を広く伝えることに情熱を持つ人はオーストラリアに多い。国際会議では、いつも大勢の参加者を送り込んでいると聞いた。国内では今年、「COSMOS」という一般向け科学雑誌が創刊され、これは高い評価を受けているとのことだった。

COSMOS編集長は、世界科学ジャーナリスト連盟の会長を務めるウィルソン・ダ・シルバ氏である。本人からのメールによると、同誌はオース

トラリア雑誌協会から賞を受け、シルバ氏は今年の「エディター・オブ・ザ・イヤー」に選ばれた。

07年のメルボルン会議の具体的な内容が決まるのはこれからだが、世界の科学ジャーナリストと連帯を深め、自らの仕事へのヒントをつかむまたとない機会である。第4

回のモンリオール会議の例にならえば、世界会議で何らかの発表をする会員には、JASTJから旅費の一部が補助されることになるだろう。いまから準備をして、あなたもぜひ参加を。

一方、世界科学ジャーナリスト連盟は、11月10～12日、ブダペストで理事会を開いた。現在、26団体が加盟しており、うち300カナダドルの会費を払ったのが7団体。この7つには、JASTJと日本医学ジャーナリスト協会が含まれる。途上国の科学ジャーナリスト養成プログラムに英国、カナダ、スウェーデンの援助機関が資金を出してくれそうな状況であることが報告され、第6回世界会議の開催国の選定方法を早急に決めることなどが決議された。
(高橋真理子)

科学ジャーナリスト賞の募集開始

第1回受賞候補の推薦・応募受け付け、
締め切りは2006年2月末

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は、「第1回科学ジャーナリスト賞（JASTJ賞）」の受賞候補の募集を始めました。この賞は科学技術に関する報道や出版、映像など広い意味での科学技術ジャーナリズム活動で優れた成果をあげた人を表彰するもので、自薦・他薦を問わず広く受賞候補を募集します。会員の協力により報道機関や出版社、多数の有識者に候補の推薦を依頼しましたが、会員からの候補の推薦をもっとも期待しておりますので、皆様には自薦も含めて積極的な推薦をお願いします。

会員の協力で推薦依頼状を発送

科学ジャーナリスト賞の準備は、JASTJ賞担当理事（柴田、武部、高木）のほか、ホームページ担当理事の片桐さんやサポーター役を買って出てくれた会員の池田純子さん、JASTJ事務局の皆さんの協力で順調に進んでいます。

まず、科学ジャーナリスト賞の受賞候補をできるだけ幅広く募るためにJASTJ会員の協力を得て、候補を推薦してくれそうな有識者、科学技術関係の主な研究機関、報道機関、出版社などをリストアップしました。おかげさまで150人以上の人たちに推薦依頼状を送ることができました。

しかし、JASTJ賞は何よりも会員からの推薦がもっとも大事です。第1回JASTJ賞を成功させるためには優れた候補をできるだけ多く集め、だれもが納得する受賞者を選ぶことが大切です。そこで、以下に賞の趣旨や推薦方法などを盛り込んだ「募集要綱」を記しますので、会員のご協力を強くお願いします。（高木勲生）

推薦の募集要綱

■JASTJ賞の狙い

科学ジャーナリスト賞（JASTJ賞）は、科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果をあげた人を表彰します。

■授賞対象

原則として個人(グループの場合は代表者)とし、ジャーナリストのほか優れた啓蒙書を著した科学者や科学技術コミュニケーターなども対象といたします。選考委員を除くすべての人に開かれ、自薦、他薦を問いません。

授賞対象となる成果は、広い意味での科学技術ジャーナリズム活動、啓蒙活動全般で、2005年4月から2006年3月末までに新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、出版物などで広く公表された作品（記事、著作、映像など）です。特筆すべきものがあれば、その他の分野も対象とします。他の賞との重複受賞も可能といたしますが、海外の作品を翻訳したケースは除きます。

■推薦・応募方法

日本科学技術ジャーナリスト会議のホームページにある科学ジャーナリスト賞のページから「JASTJ賞候補推薦書」(エクセル・ファイル)をダウンロード、またはプリントアウトして必要事項を書き込んだうえ、JASTJ賞事務局宛に電子メールか郵送、またはFAXでお送りください。

送り先・JASTJ賞事務局

郵送：〒102-0073 千代田区九段北1-4-4

九段下高橋ビル7階 (株)ジェイ・ピーアール内

電子メール：hello@jastj.jp

FAX：03-3511-8004

■締め切り

2006年2末日。(ただし、3月以降に発表されたものに限り3月末まで受け付け)

■受賞者の決定

選考基準はとくに定めていませんが、日本科学技術ジャーナリスト会議が設けた賞であることを中心に考え、社会的なインパクトがあることを重視します。

推薦された作品の中からJASTJ会員で構成する小委員会が10数作品に絞り、それらを最終候補としてJASTJ会員および外部の有識者(各同数)で構成する選考委員会で審議します。選考委員会は4月に実施する予定で、大賞1件(記念レリーフのようなものを制作する予定)と優秀賞(複数)を決定いたします。優秀賞には「スクープ賞」「アイデア賞」「ドキュメンタリー賞」など、作品の内容にふさわしい名前をつけて表彰することも考えています。

■表彰式

2006年5月に開催する日本科学技術ジャーナリスト会議総会でを行います。なお、表彰は正賞のみで、副賞(賞金など)は予定しておりません。

選考委員は下記のとおり。

外部委員(敬称略・50音順) = 北澤 宏一(科学技術振興機構理事)、黒川 清(日本学術会議会長)、白川英樹(筑波大学名誉教授)、村上陽一郎(国際基督教大学教授)、米澤富美子(慶大名誉教授)

JASTJ委員 = 小出五郎(会長)、武部俊一(副会長)、牧野賢治(理事)、柴田鉄治(理事)、高木勲生(理事)

出版プロジェクトについて

11月24日の理事会において、日本科学技術ジャーナリスト会議の広報活動の一環として「出版プロジェクト」を立ち上げることが承認されました。ご存知のように、現在すでに、「JASTJ News」,「ホームページ」,さらには目下準備中の「科学ジャーナリスト賞」といった広報媒体があります。これに出版活動を加えることは、会員の社会に対する「情報発信の場」を提供し、結果としてジャーナリスト会議の活性化にもつながる、という意味合いがあります。

その方法として、二つの形が考えられます。一つは、あるテーマについて10～20人の会員が分担執筆して単行本レベルの本に仕上げる。もう一つは、適切な雑誌に依頼して「科学ジャーナリスト会議」を確保するこ

とです。後者の場合、軸になるテーマを予め決めておけば、何回分かまとまったところで単行本にすることも可能です。

テーマは、できるだけ広い読者層を想定し、文系理系を横断するようなものから始めるのが望ましいということで、例えば環境、食品、防災など広範な分野にまたがる「予防の科学」、美的アプローチと科学的アプローチが融合できる「色彩の科学」、さらには自然科学に携わる「研究者たちの熱き思い」や「自然科学の美しさ」など提案されましたが、これについてはやはり多士済々の会員の皆様のお知恵を拝借するのが最良の策と思われます。

そこでお願ひがあります。下記の用紙に希望テーマをご記入の上、事務局宛にファックス(03-3511-8004)していただけないでしょうか。来年1月末をめどに、テーマをお寄せください。よろしくお願ひ申し上げます。

(大江秀房)

| | |
|---------|------|
| 氏名： | 連絡先： |
| [希望テーマ] | |

「第4期 科学ジャーナリスト塾」中間報告

日本科学ジャーナリスト会議が主催する第4期の「塾」が2005年9月20日にスタートし、順調に進んでいる。今回も定員を越える申し込みがあったが50人で締め切り、日本記者クラブの会議室で半年間、12回の予定で聴講と演習を交互に隔週で行っている。塾生は12人が大学生・大学院生で、他は社会人(研究者や医師、ジャーナリスト、元大学教授、科学博物館勤務者など多様)である。前期の塾はノーベル賞受賞者の白川英樹博士が一般塾生として参加され話題を呼んだが、今期も特別塾生として毎回、出席され、熱心に議論に加わっている。

聴講は、経験豊富な科学ジャーナリストが特別に自己の記事や番組に触れ、個人史も交えた現場の話をした後、塾生が質問を浴びせる“双方向塾”を目指している。初回のオリエンテーションでは、討論「科学ジャーナリストとは？」と題し、小出五郎(NHK OB)、高橋真理子(朝日)、佐藤年緒(時事OB)らが話した後、塾生全員に志望動機に触れながら自己紹介してもらった。2回目からのテーマと講師陣は次のとおり。

新聞(柴田 鉄治/朝日OB) 雑誌(高木 勲生/日経サイエンス) 地方紙(飯島 裕一/信濃毎日) ネット放送(畑 祥雄/彩都メディアラボ) テレビ(林 勝彦/

NHKエンタープライズ)

演習では塾生が8グループに分かれて各テーマを取材し、最終日までに新聞やHP、ビデオなどにまとめて発表する。ベテランの会員がアドバイザーとなり、各班できめ細かい助言を行っている。なお、8班は以下のように構成。1班「産業と技術」浅井 恒雄/日経OB 2班「環境と化学物質」小出 重幸/読売 3班「温暖化と異常気象」高木 勲生/前出 4班「再生医療」田村 和子/共同OB 5班「原子力」林 勝彦/前出 6班「農業」引野 肇/東京 7班「知的財産」藤本 瞭/日刊工業OB 8班「脳と心」室山 哲也/NHK

今年、北大、東大、早大が国の予算を獲得して科学コミュニケーションなどに関する講座を設けたが、我々の塾は誰でも入塾できること、チームを組みグループで実習に取り組めること、ボランティア精神を生かした運営であることなどが特徴といえる。雑用を含めた諸連絡などは、塾のOB、OG(藤田 貢崇、池上 紅美、梅田 和宏、片桐 良一、長谷川 式子、中西 愛、漆原 次郎)がサポーターとして手助けをしてくれている。前期、新聞とHPの制作で最も評価の高かった池上、藤田の両氏には、制作過程の実情や注意点について塾生に語ってもらった。

さて、塾の最終日、全員の投票により新聞やHPなどの評価を行うが、今期は深い取材に基づいたどのような創造的作品が完成するのか。今から大いに楽しみである。

(林 勝彦)

●赤松 憲 (日本原子力研究開発機構 研究員)
放射線の生物影響に関する研究を行っております。放射線や化学物質への被曝に関する情報が社会に及ぼす影響、科学技術教育のあり方、研究環境の問題について関心があります。当会を通じてこれらの課題について考えていきたいと思っております。

●大西 正夫 (読売新聞社 調査研究本部主任研究員)
科学部出身。本紙解説面や読売ウイークリーなどに執筆。現在の担当分野は環境問題、医学・医療が主ですが、そのほか自然災害、科学研究の在り方、生命・環境倫理も取材・研究の対象としています。

●橘 由里香 (東大大学院総合文化研究科・科学技術インテグレーション養成プログラム特任助手)

元は科学記者の卵だったのですが、思うところがあり大学に戻りました。現在は、地球科学と、科学技術社会論を研究しています。機会があれば、また科学記事を書きたい気持ちも押さえがたく、塾にも参加して勉強しています。どうぞよろしくお願いたします。

●五島 綾子 (静岡県立大学 経営情報学部教授)
市民に先見性のある視点で科学をわかりやすく伝え

ることが、環境問題や健全な市場の形成のために重要だと認識されるようになってきました。化学研究の経験を生かしてサイエンスライターを目指して社会に貢献したいと考えており、当会から多くを学びたい。

●藤山 秋佐夫 (情報・システム研究機構 国立情報学研究所教授)

1989年からヒトゲノムプロジェクトにかかわり、現在はヒトとチンパンジーを中心に比較ゲノム研究を進めています。2003年からは、一般社会と研究者を対象に生命科学の情報交流を行うための「日本語バイオポータル」の研究開発にも従事しています。

<賛助会員>

●早稲田大学 大学院政治学研究科科学技術ジャーナリスト養成プログラム

日本科学技術ジャーナリスト会議の目的に賛同し、今後、互いの人的なネットワークや会員相互の人とのつながりの機会を最大限に活かしながら、科学技術ジャーナリズムの発展を共に推進していくことを願っております。

事務局だより

■ フィンランドの科学技術と社会を学ぶ機会に

北欧フィンランドの科学技術や研究を知ってもらいたいと、日本との交流促進を願ってフィンランドセンター(大使館)から当会議に協力の呼び掛けがありました。2006年に、両国にとって興味がある研究分野について研究者やジャーナリストとの交流の場を設けるキャンペーンを展開したいとのことです。

フィンランドの科学技術は、世界に誇る携帯電話をはじめ、ユビキタス、機能性食品、福祉テクノロジー、ナノ・テクノロジー、北方圏環境保全研究などが進んでおり、それを支える手厚い義務教育や高い水準の理科学力、女性の社会参加も特徴です。

この1年間、フィンランドから専門家を呼んでの講演

会も数多く聞くほか、報道関係の交流を兼ねた意見交流会やセミナー、フィンランドへの視察旅行などを行いたいとのことです。

ジャーナリスト側が、このようなことを知りたいとテーマを提案すれば、それに対して研究者の取材やシンポジウムの開催なども可能だとのことです。個人的に情報を入手されたい方、または同会議でこれらの一連の企画に積極的に参加いただける方を募集しています。問い合わせ先は事務局に。

【訂正】会報36号の「例会報告2」に誤りがありました。講演者の名前が、見出しと写真キャプションで「武市雅俊」とありますが正しくは「竹市雅俊」です。編集上の手違いをお詫びし、訂正いたします。

編集後記

・科学ジャーナリストの書いた本の出版が、このところ目に付きます。日本ではこれまで、新聞、雑誌での連載をまとめたものはあったけれど、書き下ろしは少なかったと思います。歓迎すべき現象でしょう。
・この秋、久しぶりに展覧会めぐりに精を出しました。北斎展、プーシキン美術館展、ダ・ヴィンチ展、仁科芳雄と原子物理学のあけぼの展。科学者ダ・ヴィンチも人気を集め、若い女性がけっこう目立ちました。科博での仁科展は、さすがに静かでしたが、やはり知名度の差なのでしょうか。
・「会員だより1」の筆者は最高齢会員の一人です。さすがに、ナノテクのブーム前から今日の事態を予感していたようです。とっておきの裏話を書いてもらいました。ほかの会員の方々も、おもしろいネタがありましたら遠慮なくお寄せください。(賢)

写真撮影者(数字は掲載ページ) 片桐良一(2, 4)、元村有希子(3)、内山哲夫(5)、門脇 仁(6)、桃木暁子(7)、高橋真理子(9)

編集・発行

日本科学技術ジャーナリスト会議
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒102-0073 千代田区九段北1-4-4 九段下高橋ビル7階
(株)ジェイ・ピーアール内 電話・ファクス 03(3511)8004
会 長 小出五郎 hello@jastj.jp
事務局 佐藤年緒 hello@jastj.jp
編 集 長 牧野賢治 makinok34@yahoo.co.jp

ホームページ <http://www.jastj.jp>